

英米文化の背景

「英米人の迷信・俗信」考(1)

藤 高 邦 宏

岡山理科大学教養部

(1992年9月30日 受理)

序

今回のシリーズ寄稿計画に当たっては、英米の民俗学関係の文献等を主体に、聖書・神学・史学・自然科学その他多方面の文献及び資料を要し、絶版文献の検索及び借用の労を快く取っていただいた、岡山理科大学図書館の、木村清則・澤見照美・立古真の諸氏始め職員の方々に心より感謝申し上げたい。また、アメリカの迷信についてご助言をいただいた Elenor Koch 先生（吉備国際大）、イギリスのそれについてご助言をいただき、原稿作成の段階でも、数々の貴重なご教示を賜った Piers H. T. Dowding 先生（岡山商科大）始め、山下光昭先生（ノートルダム清心女子大）他多数の方々に、厚くお礼申し上げる次第である。

〈異文化の中での迷信・俗信体験談〉

以下は昨年の夏、日本の貿易商社に勤める若いエリート K 氏が、初めてのロンドン出張をした時の話である。彼の任務は、小型情報機器を、ロンドンの販売商社に大量輸出するための契約を取ることで、何としても契約を取って帰るように、という至上命令であった。ロンドンに着くと早速手筈通り、先方の社長 W 氏と商談をした。わずか10分しか話が出来ず、色好い返事は全く期待出来ぬ感触であった。帰りに秘書嬢に挨拶をした時、苦悶の顔つきをした彼を気の毒に思ったのか、彼女は、社長の夫人が現在入院中である、と暗示をしてくれたのである。

その日の夕方、彼は花屋でバラの花束を買い、W 夫人の入院先へ見舞いに出かけた。花束を差し出した時、夫人は、“Oh, beautiful! Thank you so much!” と礼は言ってくれたものの、ちょうど居合わせていた夫の W 氏と顔を見合わせて、幾分緊張した顔つきになった。花束のバラは紅白取り混ぜたものであったが、K 氏は、「紅白の花を取り混ぜた花束は、病室に死人が出ることを意味する」¹⁾ などとは、全くもって識らなかったのである。K 氏がこの迷信について識ったのは、帰国後に週刊誌の迷信のコラムを読んだ時であった。後で思うに、あの翌日の商談で、W 氏の好い返事がもらえなかったのも道理であった。その二日後、K 氏が再度 W 夫人を見舞った時、夫人はベッドで起き上がり、手鏡を覗いていた。

ところが、ふと手を滑らせてしまい、鏡を床に落として割ってしまったのである。夫人は、“Oh, no, . . . I'll have seven years of bad luck! (まあ、とんでもないわ、…七年も不幸が続くことになりますわ!)”²⁾と青白い顔が一層青ざめたかのように見えた。その時K氏は、婦人のサイドテーブルの上に、卓上塩入れがあるのに気付く、彼としては初めての思い切った行為——「塩を手にとり、自らの左肩ごしに投げること」³⁾——をやったのけたのである。結果的には、彼の機転を利かせたこの行為が夫人に大いに喜ばれ、彼はむしろ照れた気持ちになった、と言う。幸運にもその翌日のW氏との商談は大成功し、最後にW氏はこう言った。“We're very happy to know you can understand us English people. I completely like you, . . . ah, . . . I believe your words. Good luck! (あなたが、我々イギリス人を理解してくれると分って、とても嬉しいですな。私は、あなたを本当に気に入りました…ええ、…あなたの言葉なら信じますよ。ごきげんよう!)” こうしてK氏は、意気揚々と帰国の途に就いたと言うことであつた。

〈文化の背景にある迷信・俗信〉

「不吉な事が起きた場合には、自らの左肩越しに塩を投げれば良い。」⁴⁾と言う英米人の俗信は、時として観られるものであるが、K氏は学生時代に読んだ話を思い付き、実行してみた訳である。日本文化の中では、「紅白」と言えば「日出度さ」・「縁起の良さ」の象徴である筈だが、イギリス人夫妻には、「紅白の花のブーケ」は余り有り難くなかつたのである。また、紅白の花束が何故不吉とされるかについては、「ローマ時代に、死亡した恋人たちの墓に、紅白のバラが供えられた習慣」⁵⁾が、現代にまで命脈を保っているものである。また、「鏡を割ると七年不幸が続く」⁶⁾と言う俗信についても、実はこれには多様な謂れがあるが、その一つは、「ローマ人は、生命は七年毎に再生されるものと考えた事から、'broken (割れた)' 鏡は、'broken (損なわれた)' 健康に通じ、それが回復されるには七年を要する」⁷⁾と言うものがある。こうした迷信・俗信は、いずれの国の人々の日常生活の中にも観られるものであり、その「国民・民族の心」として、その生活文化の底流を成すものである。こうした事情を鑑みれば、迷信・俗信は、その国民の「文化の背景を成すものの一つ」である、と見做し得るであろう。

〈迷信・俗信の非科学性〉

いかなる国の迷信・俗信も、その大半のものは不合理という性質——非科学性——を持つものである。人間の科学文明の進歩に伴って、迷信・俗信の持つ非科学的特質が大いに暴露されて来た結果、現在では全く姿を消してしまった迷信・俗信も、数多くあるであろう。また逆に、それが暴露されているにも拘らず、その事は承知の上で、尚も活用されているものも、数多くあるようである。この「非科学性を承知の上で活用される」という性質は、迷信・俗信の持つ不思議な属性の一つである。

〈宇宙飛行士と迷信・俗信〉

今日の科学時代の最先端を行くとも言える「宇宙飛行士」が、ロケットに搭乗する直前に、十字を切って更にVサインをする姿は、如何に考えられるであろうか。科学者に信仰心があったり、縁起を担ぐ言動が観られるとしても、何の不思議さも感じられないのではないであろうか。むしろそのような姿にこそ、その人の「人」を、「人間らしさ」を感じずにはいられない次第である。そこには、人が「生きている」という生活感が強く存在し、それこそ正に、彼が「生きた文化」の中に納まっている証、とも言えるであろう。

〈自然の法則 — 科学 — への人格的干渉〉

迷信・俗信を非科学的なものとして割り切り、排除しようとする考え方があるとする時、他の一切には何の異議も唱えないものではあるが、一つだけその考えに再考を加えることを提案したいものである。それは、「信仰に関するもの」である。例えば、旧約聖書の創世記の中で、「イヴの誕生に関して」次のように述べられている。

And the rib which the LORD God had taken from man, made hee a woman,
& brought her vnto the man.⁸⁾

(こうして神である主は、人(アダム)から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。)⁹⁾

「イヴは神によってアダムの肋骨から造られた」というこの非科学性をもって、これが単なる迷信・俗信の類と処理する考え方について、異議を申し立てようと言う訳である。聖書に記述されたこの話を、信じる信じないを争うこと以前に、我々は一つの認識を持たねばならぬのではないかと思うのである。

こうした話は、信仰の世界では、所謂「^{いわゆる}奇跡」と呼ばれているものであるが、「奇跡」は、「自然法則の違反」ではなく、それは「自然の法則への神の人格的干渉」と呼ぶべきものであり、その認識がなされるべきなのである。その認識こそは、この「奇跡」を信じることの是非を超越し得るもの、と言えるであろう。

「自然の法則への干渉」について、もっと卑近な例を挙げれば、次のようになる。

(1) $1 + 2 = 3 \dots$ (自然法則)

(2) $1 + 2 = \infty \dots$ (自然法則への干渉)

(1)は、まさに自然法則における算術のルールである。ここで(2)についても、これが成立することを考えてみたいものである。ここで数字1と2に、「人の英知」という意味合いを含める干渉をしたとすると、

1 人の英知 + 2 人の英知 = 無限大多數の英知
(≠ 3 人の英知)

と考えられるのではないであろうか。こうなると、(2)は正に成立することになる。「三人寄れば文殊の知恵」¹⁰⁾ という諺があるが、これは、人が三人知恵を合わせれば、ただの三人のではなく、無限万人の知恵を持つと言われる、文殊菩薩¹¹⁾ の知恵にも相当するものに成るとも解せようと言うものである。

〈「迷信・俗信」は、かつては「確信」であった〉

‘superstition (迷信)’ の語源は、次のように記されている。

-L. *super*, near, above; and *statum*, supine of *stāre*, to stand, which is cognate with E. *stand*.¹²⁾

(ラテン語の *super* の「近くに」「上に」の意味と、*stāre* の動詞状名詞 *statum* の「立つこと」の意味。*stāre* は近代英語 *stand* と同系統語。)

‘superstition’ とは、「(近くに) 上に立つこと」の意味になろうが、どうも意味に明瞭度を欠くようである。これに触れて、James Kirkup 氏はこう述べている。

In ancient times the survivors in battle or natural disasters were called *superstites* because they were ‘still standing above’ their fallen fellow-men. Today’s superstitions are therefore ‘survivors’ from olden days.¹³⁾

(昔、戦闘や天災で生き残った者は、*superstites* と呼ばれた。その理由は、彼らは倒れた仲間たち「の上にまだ立っていた」からである。今日の迷信は、それ故に昔の時代から「生き残って来たもの」である。)

‘superstition (迷信)’ の語源は、「昔の時代から生き残ってきたもの」という同氏の考えも大いに頷けるのであるが、もう一つ次の解釈も可能と信じるものである。上記の引用書の同所に、

-L. *superstitiōnem*, acc. of *superstitio*, a standing still over or near a thing, amazement, wonder, dread, religious scruple.¹⁴⁾

(ラテン語 *superstitio* の対格 *superstitiōnem* から。事物、驚き、驚異、恐怖、心の呵責に直面して、その場にじっと佇むこと。)

と記されている。古代の人々は、その生活の中で有形無形の諸々のもの(事)に直面し、その不思議さに対して、何とか説明等を加えようとして、その場にじっと佇み、その知恵を絞った時、浮かんだ考えが彼らの「信じるもの(事)」であった、と考える訳である。彼らの「信じるもの(事)」が、後の時代の人びとの進んだ知識によって見直され、不合理だ

とされた時、それは「迷信」と言う名で呼ばれるようになった、と考えられ得るのである。つまり、今で言う「迷信」とは、かつては正に「確信」だったのである。

〈「迷信・俗信」が、かつては「確信」であった証拠〉

古代人たちが知恵を絞って考え出した「確信」には、後世の人間には理解されにくい点の一つあるように思われる。それは、古代人のその「確信」には、「真摯な姿勢があった」と考えられる点である。今でこそ「日食」等も、天体の理屈で説明されるが、古代人にとっての「日食」の不思議さ、いやその恐怖は、生命の危険さえをも感じさせたに違いないであろう。それだけに、彼らの「確信」には、「真剣さ」が込められていたのである。

昔の人々の真剣さが込められた「確信」の証として、この上なく明白な例は、「魔女裁判とその処刑」に関するものであろう。魔女が存在して、人々に病気や危害、また天候異変等をもたらすという考えは、相当に古い時代からあったようであるが、中世になって教会の絶対的権力が確立されていた時代に、異端者としての魔女の存在と、その魔力への恐怖が最高潮に達した結果、異端者狩りと絡めて、魔女狩りが行われ、まさに人権無視の裁きによって、火刑等の極刑が断行されたのである。西ヨーロッパ全域で、その検挙者・被害者は、何万人にも上ると推定されており、新天地アメリカにおいても、代表的な事例として、1692年にマサチューセッツの開拓者の寒村サレム (Salem <セイラムとも>) において、約150名が検挙され、そのうち30余名もの処刑者を出している事実がある。¹⁵⁾

今で言う「迷信・俗信」が、かつては「確信」であった証となるもので、これほど大掛かりで悲劇的なものはないであろう。英米の現代の人々のうちで、魔女の存在を信じる者は、一部の宗派に属する人々以外には、まず居ないであろうが(今の時代で、「魔女」と呼ばれ得るものを挙げるとすれば、世間から超能力者・霊能者と持て囃される人々とか、もっと身近な例では、子供に異常な程度の期待を寄せる教育ママと呼ばれる人々等が、それに相当するのかもしれないが)、当時においては、魔女の存在は、当然の事として確信されていたのである。こうした犠牲者の中に、フランスのジャンヌ・ダーク (Joan of Arc; 1412~1431)¹⁶⁾ がいる。百年戦争 (1337-1453)¹⁷⁾ の折、農家の娘であった彼女は、天使の声を聞き、フランス軍の先頭に立ち、イギリス軍と戦い勇名を馳せたが、後にイギリス軍に引き渡され、宗教裁判で異端とされ、火刑に処せられたのである。裁判時の彼女の手記と言われるもの(印刷物)を観るとき、一体何故をもってこの筆跡の主を「魔女」と判定し得たのであろうか、と大いなる衝撃を禁じ得ないのである。人間にとって「確信」程恐ろしいものは無い、と言わざるを得ない。

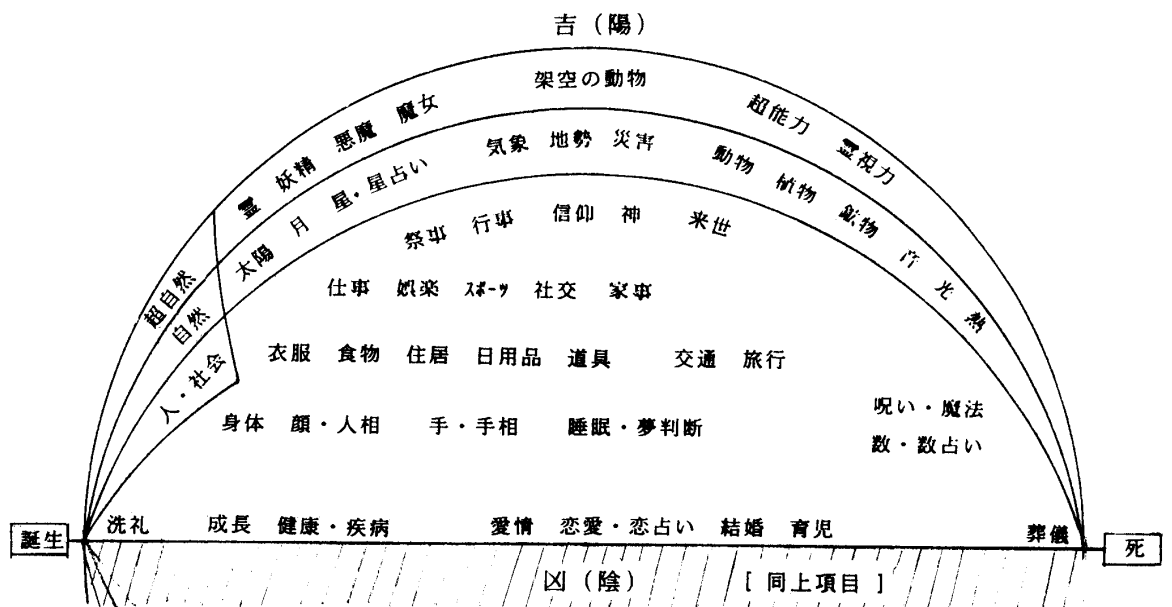
〈本稿での「迷信・俗信」の扱い方〉

英米の迷信・俗信は、広く言えば、カナダ・オーストラリアその他を含む英語文化圏のものであり、同時にそれはまた、ヨーロッパ全域にも概共通するものおおむねと言えるであろう。

多種多様の迷信・俗信を、極力数多く扱おうとする場合の整理体系化、また少なくともトピックスとして扱う場合の掘り下げ方の問題、更に、迷信・俗信を、そのルーツ究明に中心を置きながら、時代区分及び地域別に整理する方法等種々の扱い方が考えられる。また迷信・俗信を考察する視点として、民俗学的な見地から観るか、あるいは心理学的、構造主義的な見地から観るかの問題もあるであろう。

日本で出されている英米の迷信・俗信を扱ったものは、極めて少なく、それは英文学研究者や英語教師の便宜を図るために、ごく一般的な大まかなものを、おいおいにして断片的に解説したものと見受けられる。迷信・俗信が人間の生活全般に関わっている——言わば「生まれてから死ぬまで迷信・俗信に付き纏^{まと}われている」——という事実をも鑑み、本稿では、人が誕生して死に至るまでの、生活全般の中で観られる迷信・俗信を、極力数多く扱い、その体系化に努めると共に、しばしば不明という難点を持つそのルーツ探索、及び時代的・地域的調査をも加味し、その個々のものの特質によって民俗学的、心理学的等の考察を試みる、という「迷信・俗信の総合的な扱い」をするものとする。

迷信・俗信の「世界」は、「人の生涯を取り囲む世界」であり、私流の提言を試みれば、それは、「生きることを中心軸にした、陽と陰の『吉凶』明暗が反転する、球体の世界」と言えそうに想えるのである。この球体の世界を、真半分に断ち、その中身である迷信・俗信に関する主たる項目を示すと、次のようなものとなる。



迷信・俗信の世界の断面

当拙稿の内容等につき、調査研究の不十分な点を始め、また異論・異説等についても、是非ご教示の程を願うものである。

I 誕 生

1. 生命誕生の神秘性

洋の東西を問わず、いずれの国でも、「赤ちゃんは、何処から来るの?」という幼い子供たちによる素朴な疑問がある。英米の大人たちは、その答として、「コウノトリの訪れ(visit from the stork)」による説明を持ち出すのが典型的なようである。これについては、次のような記述がある。

In his fairy tales, Hans Christian Andersen, the Danish writer (1805-1875), immortalized the myth of north European countries, that the stork brings a baby sister or brother to a family, and drops it down the chimney.¹⁸⁾

(お伽噺で、デンマークの作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン(1805-1875)は、コウノトリが家族に赤ん坊の弟妹を運んで来て、それを煙突から落とす、という北欧諸国の神話を不滅のものとした。)

古来コウノトリは、幸福をもたらす鳥として尊重され、特にこの鳥が巣を作った家には、必ず赤ん坊が誕生するという伝承がある。この「コウノトリの訪れ」説は、元来オランダ・デンマーク等の北欧諸国に、その起源を持つものと見做される。

幼い子供たちの質問に対しては、「コウノトリの訪れ」説以外にもいろいろな答——「樹・土・井戸・湖などから生まれた」¹⁹⁾ というような答——がなされるようであるが、この他に割によく用いられる答に、「キャベツから生まれた」というものがある。この「キャベツ」説の起源については、次のようなものがある。

...perhaps rooted in the ancient acceptance of trees as immortal spirits capable of giving birth to human beings, as among the ancient Greeks and Irish and in South Africa and Indonesia.²⁰⁾

(恐らく、[キャベツ説は、]古代のギリシャ人やアイルランド人の間で、また南アフリカやインドネシアでのように、古い時代には、樹木は人間を誕生させ得る不滅の霊である、と見做したことに根ざしているであろう。)

こうした伝承による生命誕生説は、子供の質問に対する大人の照れ隠しの逃げ口上、という便宜ばかりではなく、子供に対して生命誕生の神秘を感知させ、更にそれは、「生命尊厳の考え」を暗示指導することになるであろう。生理学・医学による科学的な生命誕生説明と共に、俗信・迷信とはいえ、伝承的な生命誕生説も、大いに重要な意味を持つのではないであろうか。

2. 出産と安産への願い

英米では、昔は大抵、出産は家庭でなされ、妊婦に陣痛が始まると産婆(midwife)が呼

びにやられた。産婆は、赤ん坊を取り上げるのみならず、母子の健康や新生児が幸運であるようにと、呪いやお祓いをも施す習慣があったと言われている。現代以上に危険を伴った所為か、イギリスの一部の地域、特に Herefordshire 辺りでは、「擬娩 (*couvade*)」と呼ばれる習慣があり、夫も妻と同様に床につき、‘There he pretends to suffer sympathetic labour pains. (そこで彼は、共に陣痛を被るふりをする。)’²¹⁾ のだと言われた。‘*couvade* — from the French, meaning to hatch (「クヴァド」は、「雛を孵す」の意のフランス語から)’²²⁾ であり、相当に古い伝統のある風習であったようである。今ではこの習慣は、まず無くなっているものと観てよいようである。これに関連して、次のような記述が見られる。

‘*Couvade*’ existed within living memory in Hereford and Worcester; in Yorkshire, too, particularly in the north, it gave rise to a curious tradition. If the mother of an illegitimate child would not reveal the father’s name, her relatives would search the village for any man ill in bed — the first they found was supposed to be the father.²³⁾

(「クヴァド」が存在したことは、ヘレフォード・アンド・ウースターで、現在生きている人々に記憶されている。ヨークシアでも、特に北部でだが、クヴァドは、奇妙な伝統を生み出した。もし私生児の母親が父親の名を明かそうとしないならば、彼女の身内たちは、村中の病気で寝ている男を誰彼なく捜し歩いたものであった——彼らが最初に見つけた者が、その父親だとされたのである。)

かつては無事出産が終わると父親は、祝いの菓子とチーズ——「陣痛菓子(*groaning cake*)・陣痛チーズ (*groaning cheese*)」と呼ばれる——を誕生に居合わせた人すべてに、また隣人・知人に、彼らの幸運を祈って分配した。昔は父親が、子供の誕生する前に菓子・チーズを作り、子供の誕生を待ち受けたと言われるが、この頃ではこのような父親は極めて少なくなり、英米の父親の中には、チーズ・パン・アーモンド等を買って、それを配る者があるようである。

‘*dreaming cake*’ という言葉があるが、日本語では「夢見菓子」とでも言うべきであろうか。これは、陣痛チーズの中央をくり貫いて、大きな輪を作り、洗礼日にこの輪の中を子供にくぐらせる風習が、かつて Oxfordshire や Yorkshire 辺りに観られたが、未婚の女性がそれを一切れもらい、枕の下に入れて寝ると、「夢」の中で未来の夫たる人に逢える、²⁴⁾ という俗信から出た言葉である。この ‘*dreaming cake*’ の俗信は、Yorkshire の片田舎では今も伝えられていると言う。

現代では、出産は普通の場合病院・医院でなされる。無事出産を願って、分娩室前の廊下を往き来する夫の姿が見られることがあるが、それは昔のいわゆる「擬娩」の風習の現代版と言えるものであろう。

生まれてくる子が、男児か女児かの希望・期待がなされることは、いずれの国でも同じ

ことであろう。一般的には、男の子の誕生を、喜ぶ場合が多いようであるが、米国では、むしろ女の子の誕生を喜ぶようである。米国では、親夫婦が、結婚した子供の家で一緒に暮らすことは少ないが、それでも夫婦のいずれかが亡くなった等の場合には、残った者が子供夫婦の家庭で暮らすことはある。ところが、一般に夫婦のうちでは、夫のほうが年齢が上なので、妻は夫に先立たれ一人になりがちであり、その場合彼女は、息子夫婦の家で暮らすよりも、娘夫婦の家で暮らすほうが、精神的に楽だと考える所為か、後者のほうを選ぶようである。そうした事情から、一般にアメリカ合衆国では、女の子の誕生をむしろ好む傾向がある。

男児・女児の産み分けについては、将来科学的に確率の高い方法が、示されることであろうが、この善し悪し等については、また諸問題が生じることであろう。その事はともかくとして、男児・女児の産み分けについての俗信に関しては、英米の各地で多様なものがあるようである。例えば、一般的によく言われるものとして、

*「妊婦のベッドの敷布団に、ナイフを突き立てると、男の子が生まれる」²⁵⁾ というのがある。古来「ナイフ」には「男根」のイメージがあり、「突き立てる」を「直立状態にする」とと解すれば、それは、威勢のよい男児誕生への願望に結びつくもの、と考えられるであろう。

*一部のアメリカ人の間では、鶏の首を刎ねて、男女児の産み分けをしようとする呪いが観られる。ジョン・スタインベック (John Steinbeck) の1930年代の作品『知られざる神に (To A God Unknown)』の中には、以下の記述が見られる。

Every morning Rama came to talk, always in secrets, for Rama was full of secrets. She explained things about marriage that Elizabeth, having no mother, had not learned. She told how to have boy children and how to have girl children — not sure methods, true enough; sometimes they failed, but it did no harm to try them; Rama knew a hundred cases where they had succeeded. Alice listened too, and sometimes she said, “That is not right. In this country we do it another way.” And Alice told how to keep a chicken from flopping when its head is cut off.

“Draw a cross on the ground first,” Alice explained. “And when the head is off, lay the chicken gently on the cross, and it will never flop, because the sign is holy.” Rama tried it later and found it true, and ever after that she had more tolerance for Catholics than she had before.²⁶⁾

(毎朝、ラーマがやって来て、きまって秘密を話して行った。彼女は秘密に溢れていた。彼女は、母のないエリザベスが知らなかった、結婚についてのいろいろなことを話した。彼女は、どうしたら男の子が生めるか、またどうしたら女の子が生めるかを話した。それは確実な方法ではなかったが、しかし嘘ではなかった。失敗する人も時にはいた。しかし、それをしたからといって害にはな

らなかった。ラーマは、成功した例を百も知っていた。アリスもじっと聞いていた。そして時々口をはさんだ。「それは違います。ここでは別なやり方でやります」アリスは、首を切った時、鶏が跳びはねないようにするにはどうするかということ話を話した。「まず地面に十字を書くんです。」とアリスは言った。「そして、頭を切ったら、その十字の上にそっとその鶏を置くんです。そうすれば、決してはねたりしません。その印が神聖だからです」ラーマはあとで試してみても、それが正しいことを知った。そしてそれ以後は、カトリック教徒に対して以前より大分寛容になった。)27)

それでこの後、どうすれば男女児の産み分けの呪いになるのかは、記されていないのであるが、その後エリザベスは男児を出産する。

安産を願っての神への祈りが、夫や関係者によってなされることは勿論であるが、古来次のようなことが安産に役立つと考えられている。

* 出産を楽にするために、家の中の扉の鍵を全部開け、結んであるものを解く。28)

* 産褥さんじよくの床のベッドに、釘を打ったり、鉄を隠したりする。29) 釘や鉄は金属でできており、魔除けになると信じられる。これは、出産を邪魔しようとする悪霊・悪魔・魔女等を、寄せつけない効果があるとされる。彼らは、金属、特に鉄によって、その魔力が封じられるものと考えられたのである。

* 妊婦の首の周り、またはベッドに、護符や呪いを書きつけたものを、付けたり入れたりしておく。30)

* 妊婦の腿の周りに、イーグル・ストーン (eagle stone 鷲石) を結びつけておく。31) イーグル・ストーンについては、ローマ時代の博物学者プリニウス (Pliny the Elder) による記述が興味深い。

それ [鷲石] はワシの巣の中で発見される。それは雄と雌の対で発見される。それがないと、そのワシは子を産むことができないという。……鷲石を生贄にされた動物の皮に包んで、流産を防ぐために、妊娠中の婦人や四足獣のからだに護符として付ける。それは分娩の瞬間まで外してはならない。そうでないと子宮の脱垂が起る。他方、分娩中にそれを外さないと子供が生れて来ない。32)

イーグル・ストーンは、一般には黄褐色の小石で、東方のワシの巣の中にあり、雌ワシが産卵の苦痛を和らげるため、また卵を毒から守るために利用した、33) とされるものであるが、かつてはそれを妊婦の安産の護符としてよく用いたようであるが、現在では、この習慣は、まず観られなくなっているようである。

* 教会の鐘の音は、産褥の苦しみを和らげるのに役立つと言われる。34)

こうした安産への願いと共に、産後の母親の体力回復についても、多様な俗信があるよ

うであるが、そうしたもののうちで幾分変わったものとして、「出産直後、ベッドの下でひよこの羽を焼くと、産後出血を防ぐ」³⁵⁾と言うものがある。今時この俗信は皆無であるが、「ひよこ」に限らず、一般に「羽毛 (feather)」には、空気や精気中の「不純物の浄化」の意味があるとされ、³⁶⁾それを「焼く」ことによって、不浄と見做されていた出産の「浄化」を、一層確実なものにしようと意図したものであろう。

3. 新生児に「魂」を入れる

子供が誕生したとき、その子に人としての要件——「魂」を有すること——を備えてやるのが、親の務めである。欧米諸国では、赤ん坊に「魂」が宿るようにすべく、家の戸や窓をすべて開放し、家の中に魂を呼び入れようとする。³⁷⁾この俗信は、都会で暮らす人々よりも、地方で暮らす人々の間でよく見られ、米国では現在も広く観られるようである。

4. 誕生の日・曜日と運勢

子供が生まれてくる日や曜日には、善し悪しがあるとされる。生まれるのに最も好い日は、クリスマスとクリスマスイヴだと言われる。しかし、これらは年に一度の日であり、それ以外の日でも勿論大いに結構なのである。ただし、幼児殉教の日 (Childermas; Holy Infants' Day とも) の12月28日は悪しき日とされる。この日は、ヘロド王の命令によって、ベツレムの子供たちが虐殺されたとされる記念日であるため、特に悪しき日とされる。また一般に5月も好ましくないとされる。

May-born babies, like May kittens, are usually said to be weakly and unlikely to thrive.³⁸⁾

(五月生まれの赤ん坊は、五月生まれの子猫と同様に、普通虚弱で育ちにくいと言われる。)

5月は、子供の誕生に悪しき月であるばかりでなく、結婚にも悪い月とされるが、それは、「ローマ人の迷信で、この月には、純潔・貞節の女神ポナデアの祭典と、レムラリアと呼ばれる死者を祭る儀式が行われた」³⁹⁾ことが、一般にその理由であると考えられている。

5月生まれの子は、'May chet' と言われ、Cornwall 地方などでは嫌われる⁴⁰⁾と言う。'May chet' は「五月っ子・五月っ娘」と和訳出来そうである。'chet' は 'chit' の訛ったものと考えられる。'chit' は、'Applied, more or less contemptuously, to a child, especially a very young child (多少軽蔑的に「子供」特に「幼児」の意)」⁴¹⁾であるが、この語には特に、'pert girl (「生意気な小娘」)」⁴²⁾の意味も含まれており、それに、「おいおいにして女児の誕生が歓迎されなかった風習」をも考え合わせると、「五月っ娘」の和訳は、'May chet' の持つ本来の意味を、表すものと言えるかもしれない。しかし、一般的には、5月生まれの子供は男女児合わせて、'May chet' = 「五月っ子」の和訳が適切と言えるであろう。

子供が誕生する曜日にも吉凶があるとされており、その一つとしてよく知られているものに、イギリスの古い童謡 (nursery song) がある。

Monday's child is fair of face, (月曜日生まれは器量よし、)
 Tuesday's child is full of grace, (火曜日生まれは「神の」恵み多し、)
 Wednesday's child is full of woe, (水曜日生まれは悲しみ多し、)
 Thursday's child has far to go, (木曜日生まれは遠くさすらい、)
 Friday's child is loving and giving, (金曜日生まれは愛嬌者で気前よく、)
 Saturday's child works hard for his living, (土曜日生まれはその日暮らし、)
 And the child that is born on the Sabbath day (そして、安息日生まれは
 Is bonny and blithe, and good and gay.⁴³⁾ 丈夫、快活、また善良で陽気。)

こうしてみる時、好い生まれの者は良い気分であろうが、例えば水曜・土曜に誕生した者は、気分の悪い思いをすることであろう。これは、既述の5月に誕生した者等についても全くもって同然であろう。逆に、月曜日・火曜日・金曜日・日曜日は、好い運勢になっており、安息日の日曜日は特に好い。一部の地域、特に Yorkshire では、安息日生まれは、悪霊等の呪いを受けない、とも言われる。これは、人々の信仰から来るものであろう。それぞれの曜日に当てはめられた運勢の根拠は、探り難いものであり、その根拠には、いささかの科学性も見出せないであろう。歴に「曜日のシステム」が何時頃採用されたかについては、ユリウス暦を用いていたローマ時代に、「コンスタンティヌス帝は、321年に七日週の使用を命じた」⁴⁴⁾とされており、これ以後ヨーロッパ大陸のキリスト教文化の中で、「曜日」のシステムが大衆に流布し、やがては上記引用の童謡の原型が造り出され、それが後になって、大陸民族のブリテン島への侵攻や定住によって、イギリスにもたらされ、子供たちの間で、この小歌が広まったものであろう。安息日の日曜日生まれが幸運とされるのは、キリスト教の特徴を示すものに外ならないのである。

5. 誕生と潮の干満・時刻

太古の昔より、人の生命の誕生は、その死と共に、潮の干満と結びつけられていた。英米の人々の間でも、次のような考え方があった。

Generally speaking, it is best for boys to be born when the tide is flowing,
 and for girls when the tide is ebbing.⁴⁵⁾

(一般的に言えば、男の子は潮が満ちて来ている時、女の子は潮が退いて行く時に、生まれるのが一番好い。)

また、海洋国英国では、次のようにも言われる。

In some seaside places, the luckiest babies are thought to be those born early in the morning while the tide is coming in.⁴⁶⁾

(一部の海岸地方では、最も幸運な赤ん坊とは、早朝潮が満ちて来ている間に生まれる赤ん坊である、と考えられている。)

この伝承では、「潮が満ちること」と「早朝の日の出」という二つの活力が、新生児の将来への活力を象徴するものとして、重ねられている。

潮の干満と人の生死との結びつきについて、19世紀の英国作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) は、デイヴィッド・コパーフィールド (*David Copperfield*) の中で、次のような記述をしている。

“People can’t die, along the coast,” said Mr. Peggotty, “except when the tide’s pretty nigh out. They can’t be born, unless it’s pretty nigh in — not properly born, till flood. . . .”⁴⁷⁾

(「人間というものは、^{うみべ}海邊ではね」ペゴティーさんはいった、「相當に潮が退いた頃でないと、死ねないんですよ。相當にいっぱいになった頃でないと、生れないんでしてね——満潮までは、ほんとうには生まれませんで。…」)⁴⁸⁾

この中でも、人の誕生には「満ち潮」が関与している事が、明言されている。当作品は、1859-50年の作であるので、19世紀半ばの英国では、「満ち潮時誕生説」は通用していたものと考えて差し支えないであろう。

日本でも、恐らくは、太古縄文の時代から、「潮の干満や月の出入りは、人の出産や死亡の時期と関係するもの」⁴⁹⁾と考えられていたであろう。また、地方によると、「満ち潮に生まれた子はモノに成るが、引き潮に生まれた子はモノに成らない」とも言われ、モノに成るとは「立派に成長する」の意で、モノに成らないとは「早死に・若死にををする」の意である。

英米では、この「誕生と潮の干満」に関する俗信が、一部の人々には、今もって固く信じられているとも言われる。いずれにせよ、生命誕生という崇高な事柄を、潮の干満という「宇宙の自然法則」の中に捉えようとした姿勢は、まさに人間の英知の具現と呼ぶべきである。この類の俗信は、世界の各地に観られ、枚挙に暇がないであろう。

6. 誕生の時刻の吉凶

英米では、一日のうちでも、誕生に好ましい「時」があるとされ、一般的には次のようである。

- * 日の出に生まれる者は、知恵と成功に恵まれる。⁵⁰⁾
- * 日没時に生まれる者は、怠惰で無気力な人間になる。⁵¹⁾
- * 生まれる時刻が遅い者は、早死にををする恐れが多分にある。⁵²⁾

* 鐘の鳴る時刻や、真夜中の一定時刻に誕生する者は、人並みはずれた能力を授かる⁵³⁾ {次の項参照}。

7. 超能力者の誕生

英米では、赤ん坊が生まれて来る時刻や、その誕生時の特殊な事情によって、その子には「超能力」と呼ぶに相応しい能力が、天から賦与される、と信じられている。

* 鐘の鳴る時刻—— 3・6・9・12時（または、4・8・12時とも）——に誕生する子供は、しばしば「透視力 (second sight 千里眼とも)」を有し、幽霊や精霊とも言葉を交わすことが可能である。⁵⁴⁾ この「透視力」を持つ者は、壁の向こうにあるものが見透かせるのみならず、「未来」までもが眺められると言われ、霊との会話能力をも合わせれば、まさに現代においても賞賛を浴びる、所謂「超能力者」・「霊能者」に匹敵するであろう。

* 夕方や、夜中の12時から1時までの間に生まれる子供も、上記と同様のものが授けられると信じられる。⁵⁵⁾ チャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』の主人公デイヴィッドは、金曜日の真夜中の十二時に、時計が鳴り出した時に誕生したが為に、

In consideration of the day and hour of my birth, it was declared by the nurse, and by some sage women in the neighbourhood, who had taken a lively interest in me several months before there was any possibility of our becoming personally acquainted, first, that I was destined to be unlucky in life; and secondly, that I was privileged to see ghosts and spirits;...⁵⁶⁾

(私の生れた日と時刻とから考えて、保姆や、また、とても、まだまだ、知合になんかなれっこのない、数カ月も前から、私に對して、ひどく興味を持っていた賢婦人連が、まず第一に、私という人間は、一生不幸な運命を持っている、第二に、幽霊や化物を見る特権を持っていると云った…。)⁵⁷⁾

とある。デイヴィッドは、幽霊や化物を見る能力——「超能力」——が備わっている、と周囲の人々から見られたようである。

誕生時の特殊な事情によって、「超能力」が授けられるとは、次のような場合である。

* 逆子 (footling — 足から先に生まれてくる胎児 = 「足位分娩児」⁵⁸⁾) で運よく生を受ける者は、「病氣治癒」の力を授かると言われる。特に、リュウマチ・筋肉痛・腰痛の治癒力に優れると信じられている。⁵⁹⁾ 昔逆子は、母子ともに危険が伴われるので、出産に無事成功する割合が極度に低いと言われていた。現代では、帝王切開手術⁶⁰⁾ で十分な対処が為されるが、かつては悲劇的な事態が生じることも、珍しくなかったと言われる。一般に、そうした珍しい幸運な誕生をする者は、人並みはずれた能力を授かるものと信じられたようである。

* 父親（または、母親とも言われるが）の死後に生まれる子 (posthumous child) も、上

述のような「治癒力」を持つとされる。⁶¹⁾

* 帝王切開 (Caesarian section) によって生まれた子供は、素晴らしい資質に恵まれ、並はずれた頑強な体や透視力を授かり、隠れた宝物を捜し出す力を持つ。少なくとも、帝王切開は何かの前兆となるものであり、⁶²⁾ また、しばしば英雄を産むと言われている。⁶³⁾

なお、'Caesarian section' とは、ローマ皇帝ジュリアス・シーザー (Julius Caesar) が、切開手術によって誕生した、という伝に基づく言葉とされているが、かつての帝王切開手術は、母親が出産中に死亡した場合に施されたようである。医学上で生体への手術成功例が多く見られるのは、今世紀初頭に成ってからのようである。⁶⁴⁾

「帝王切開は、しばしば英雄を産む」という俗信に関して、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の『マクベス (*Macbeth*)』の中で、その例が見られる。マクベスは、魔女の集会で幻影から、'...none of woman born shall harm Macbeth.'⁶⁵⁾ (「…マクベスを倒す者はいないのだ、女の産み落とした者のなかには。」)⁶⁶⁾ と予言されていたのだが、帝王切開で誕生したマクダフ (Macduff) が、王位篡奪者であり妻子の仇でもあるマクベスと闘い、遂に彼を倒すのである。

Macb. Thou lovest labour:
 As easy may'st thou the intrenchant air
 With thy keen sword impress, as make me bleed:
 Let fall thy blade on vulnerable crests;
 I bear a charmed life; which must not yield
 To one of woman born.

Macd. Despair thy charm;
 And let the Angel, whom thou still hast serv'd,
 Tell thee, Macduff was from his mother's womb
 Untimely ripp'd.

.....
 [Exeunt, fighting. Alarums. Re-enter fighting, and Macbeth slain.⁶⁷⁾

マクベス 「いくらあがこうと、むだだ。貴様の剣がどれほど鋭かろうと、この手ごたえなしの空気は斬れぬ、おれの体に傷はつけられぬぞ。その手に負える相手をねらえ、おれの命はまじないつきだ、女から生まれた人間には手がつけられないのだぞ。」

マクダフ 「ふむ、そんなまじないの効きめ、いつまで続くものか、もうだめだぞ。貴様が大事に奉っている悪魔の手先に、もう一度うかがいをたててみろ、このマクダフは生まれるさきに、月たらずで、母の胎内からひきずり出された男だぞ。」

.....

[闘いながら退場。ラッパが鳴る。闘いながら再登場。マクベス殺される。⁶⁸⁾

*七男の七男 (the seventh son of a seventh son) として生まれて来る者は、^{るいれき}瘰癧・甲状腺腫・白癬等を、患部にその手を当てるだけで、治癒できる能力を持つとの俗信がある。⁶⁹⁾

The seventh son of a seventh son, or for that matter, the seventh daughter of a seventh daughter, is still believed by many to be a child with supernatural healing powers through its hand. Such a child, especially a seventh son, is supposedly destined to become great and prosperous.⁷⁰⁾

(七男の七男、あるいは七女の七女もやはり、その手を用いての治癒の超能力を持つ子供になる、と多くの人々によって今なお信じられている。そのような子供、特に七男は、偉大な成功者になるべく運命づけられていると言われる。)

なお、上記引用の筆者 Claudia de Lys は同箇所、'seventh' については、一般によく知られている 'lucky seven (幸運の7)' に由来するものと述べている。それにしても「七男の七男」とは、極めて稀なケースであろうと想われるが、それだけにそうした超能力が備わると信じられたのであろう。

8. 誕生時の種々の事情に関する吉凶

*誕生の際に、かなり珍しいケースではあるが眼を開けている子は、幸運を授かっていると言われる。⁷¹⁾ このような子供は、誕生の時点で、既に眼を見開いて、「未来を見据えている」という幸先の良さを、示すものと考えられるであろう。

*誕生の時、頭部が南に向いている子は、幸運に恵まれる。方角については、南は太陽や生命を表し、北は死を表し死を支配する、と言われており、新生児の頭部が南に向くようにするには、母親が出産をする際に、頭部を北に向けていなければならないことになる。⁷²⁾ 母親が北枕に寝ていれば、新生児の出口は陽光の射す南を向いており、その部分が健康的な意味で、太陽によって「浄化」され、強い「生命」を産むことになる、と考えることが出来そうである。ただし、この件については、北半球においてのみ適用され得ることになる (オーストラリア・ニュージーランドでは、適用不可)。

*体の上半身に、「あざ (birthmark)」のある子は、幸運に恵まれる (次項9参照)。

*誕生の際に、大網膜 (caul—「胎児頭部を覆う羊膜」⁷⁴⁾) を被っている子は、それを保存しておきさえすれば、生涯水難を免れると言われる。水難除けになると言われる為、そうした大網膜は、船乗りたちの間では、大いに求められてきたと言われる。⁷⁵⁾

チャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』の中で、主人公デイヴィッドの誕生時の「大網膜」について、以下のような記述が見られる。

I was born with a caul, which was advertised for sale, in the newspapers, at the low price of fifteen guineas. Whether seagoing people were short of money about that time, or were short of faith and preferred cork jackets, I

don't know; all I know is, that there was but one solitary bidding, and that was from an attorney connected with the bill-broking business, who offered two pounds in cash, and the balance in sherry, but declined to be guaranteed from drowning on any higher bargain.⁷⁶⁾

(私は薄膜 [大網膜] がついて生れ落ちたのだが、この薄膜は、十五ギニイという安い値段で、新聞に賣物の廣告が出されたものである。その当時、船乗り連中は、金銭が足りなかったものか、それとも、信心が足りなくて、コルク短衣の方がいいと思ったのか、それは、私には分らない。私に分っていることは、それには、たった一つばかり入札があったので、それは、手形仲買業に關係のある代言人からで、その男は、現金で二ポンド、残額はシェリイ酒でというのだが、それより高いのなら、なにも溺死をしない保證をして貰わなくってもいいと云ったのである。)⁷⁷⁾

*「生まれながらに歯が一本生えている子は、やがて有名な人になる」⁷⁸⁾と言われる。普通、乳歯 (milk tooth; baby tooth) は、「下顎の内切歯が生後6～8カ月から生え始める」⁷⁹⁾とされているだけに、これは、極めて珍しい誕生の仕方と言えるであろう。また次のようなケースは、尚更珍しいと言えよう。

*生まれながらにして、「歯が二本生えていて、その間が広く開いている子は、成長すると遠方に旅をする」⁸⁰⁾と言われ、そうした子は、生まれた土地で生涯住むことなく、遠く他の土地に住む運命を背負っている、との俗信である。この俗信から言えば、アメリカ人の多くは、生まれながらにして、間の開いた歯が二本生えているのではないかと愚かしい臆測が為されそうである。と言うのも、彼らの生涯は、一般的に言って、可動性大の特質を持つ故である。

誕生した日の天候・気象についても吉凶があると信じられる。

*嵐の最中に誕生した子は、困難・苦難の生涯を送ると言われる。⁸¹⁾

*新月が、次第に満月に向かう間に生まれる子は、幸福に満ちた人生を送ると言われる。⁸²⁾

*地震の時に生まれた子は、長じて国を滅ぼす、との俗信がある。⁸³⁾ただし、地震については、イギリスではまず体験されないものであるが故に、イギリス人の間では、この俗信は皆無である。恐らくこの俗信の出所は、ヨーロッパの地震国にあるものと考えてよいであろう。

その他、天候・気象等の自然条件に関連して、山間部や農村では、次のようなことも言われる。

*クルミが豊作の年には、教区で子供が、特に男の子が沢山生まれる。⁸⁴⁾これについては、「クルミ (nuts)」の俗語としての意味に、'the [generally human] testicles ([一般に人間の] 睾丸)⁸⁵⁾とあり、その実りが豊かであるということは、「男児」の誕生が多いということに結びつくであろう。

9. 赤ん坊の「あざ (birthmark)」

‘birthmark’は、「母斑」と言われ、「生まれつきのあざ」を意味し、「打撲等によって出来るあざ・傷」を意味する‘bruise’と区別される。生まれて来た子供の顔や体に「あざ」がある場合、その原因は、その子がまだ母親の胎内に居た時の、母親の行為にあるものとされる。妊婦が、恐ろしい獣や気味の悪い昆虫を見たり、更にもっとひどい場合には、流血の場面を目撃したりする時、ショックを受けると同時に、無意識に手を顔等に当てることがある。この行為によって、生まれて来た子の顔等の、母親が手を当てた所と同じ所に「あざ」が出来る⁸⁶⁾と言われる。この俗信には、母親の「精神的ショック」の問題が絡んでいるだけに、産婦人科医からも、極力ショックを受けないように努めるに越したことはない、との言が聞かれる。

日本でも、古来今尚、全く同じことが言われる。例えば、「(妊婦は)、火事を見てはいけない。赤あざの児を生む。」⁸⁷⁾と戒められているのもその一つであろう。火災の際に、燃え上がる炎を目撃した妊婦が、ショックを受けて手を顔に当てた場合、子供の顔に「赤あざ」が出来るという結果を心配するのである。

* 赤ん坊の「あざ」を直す方法について、次の記述が見られる。

A common cure for this disfigurement was for the mother, or failing her, some other woman, to lick the mark all over every morning before she had broken her fast. The treatment had to be started as soon as possible after the birth, and continued for a period variously given as nine, twenty-one, or thirty days, or until the blemish has disappeared.⁸⁸⁾

(この損傷に対してよく用いられる治療法は、母親、または彼女に支障があれば、誰か他の婦人が、朝食を取らぬうちに、そのあざ全体を嘗めてやることであった。その治療は、誕生後極力早いうちに始められ、9日間、21日間、あるいは30日間、またあるいは、その損傷が消えてしまうまで、続けられねばならなかった。)

俗信的治疗法ではあるが、英国では今も多くの地方で、この方法が覚えられており、この治療による成功例が、1950年にホーム郡やミッドランド地方で記録されている⁸⁹⁾と言われる。唾液は、昔から、朝食前等の所謂断食状態時には、特に強力な魔力を有する、とよく言われ、また唾液には、人間だけでなく他の動物によっても、殺菌力が有るものと本能的に信じられて来ている。

10. 母から子に伝わるもの

乳幼児の中には、しばしば舌を出す癖のある者があるが、それは、母親が妊娠中に食べたいと思った物を、何らかの事情で食べられなかった場合に、その不満が子供に現れたの

だ、とする俗信がある。⁹⁰⁾ また、母親が妊娠中に好んで食べる物は、実は胎児が欲している食物であって、それは、成長後にその子の好物となる、とも言われる。

一般に、母親の好む物と嫌う物——食物は言うまでもなく、衣服やペット・花等の動植物、それに色彩等に至るまで——がそのまま子供に伝わる、⁹¹⁾ ともよく言われる。

母と子の繋がりが、絶対的に強力で崇高なものであることには、世界中の人々が同意するところであろうが、それだけに、両者の繋がりに関する迷信・俗信は、世界中で酷似しているようである。

11. 赤ん坊の「あくび (yawning)」

誕生して間もない赤ん坊や、発育期の幼児が、「あくび」をする時、親はその子の口の上で、十字を切ってやらねばならない。

If a baby yawns as soon as it is born, someone should at once make the sign of the cross over the open mouth, so that the Devil cannot enter and take possession of the infant's immortal soul.⁹²⁾

(もし赤ん坊が生まれてすぐにあくびをすれば、誰かがすぐに、開けた口の上で十字を切ってやらねばならない。それは、悪魔が入って来て、幼児の不滅の魂を、手に入れることが出来ないようにする為である。)

古代人は、「あくび」をすることによって、「呼吸が止まり、死んでしまうのではないか」と恐れ、手を口に当てようとしたらしく、あくびは生命そのものと深い結びつきがある、と考えたようである。⁹³⁾ 従って、赤ん坊があくびをすることは、その生命が危ぶまれるものと恐れたのであろう。

現代の欧米の人々が、あくびをする時手で口を塞ぐのは、目の前の相手に対するマナーからであるが、元来は「悪魔の侵入を防止する為」であった。英米人は、うっかりあくびをしてしまった後で、相手に謝る習慣があるが、それもやはり、相手に対する失礼を詫げるマナーからであるが、元来は、古代人の習慣に由来するものであろう。つまり、古代人にとっては、「あくび」は「死」を意味するものであり、自らのあくびが相手に伝染すれば、その相手をも危険に晒すことになる為、相手に謝罪したのである。⁹⁴⁾ それにしても、あくびに関しては、‘Yawning is catching. (あくびは移るもの。)’ とも言われ、その「伝染性」が、昔から不思議に思われて来たのである。

12. 育児注意事項

赤ん坊があくびをすれば、十字を切ってやることも、育児上の大切な事柄の一つであるが、その他にも、次のような育児上の重要な留意事項がある。

* 新生児は、先ず真っ先に、処女の腕に抱かせねばならない。⁹⁵⁾

* 新生児が男児ならば、母親の古着を、女児ならば、父親の古着を着せるのが好い。⁹⁶⁾ これは、特に England 地方北部辺りで言われるようである。

「揺りかご」についての俗信は、極めて多様である。

* 揺りかごは、カバの樹で作ったものが良く、ニワトコの樹で作ったものは、不吉とされる。カバの樹は魔女を寄せつけず、ニワトコの樹は、魔女がこの樹に変身すると言われ、更に、この樹は「凶数13」のイメージをも持つので、不吉とされる。⁹⁷⁾

* 悪魔や魔女、また凶眼 (evil eye 邪眼とも) からの危害を防止する為、揺りかごやベッドに、剃刀・ナイフ・鋏等の刃物を入れておくのが好い。⁹⁸⁾

* 浄化の目的で、揺りかごの中に、塩を入れた小袋を入れておくと好い。⁹⁹⁾ 塩の「浄化性」の適用例は、世界の各地に見られるようである。

* 揺りかごの中に、マッチを入れておくのが好い、と信じられている。¹⁰⁰⁾ これもやはり、火の力で悪者どもの魔力を焼き払えるように、との願いからである。

* 揺りかごの中、特に寝ている子供の枕の下に、鍵を入れておくのが好いとする迷信は、ヨーロッパ各地に観られる。¹⁰¹⁾ 勿論これは、妖精その他の悪者どもが、子供を攫さらって行かないように揺りかごに施錠しておく、という意図から出たものである。

* 強力な匂いを発するニンニクを、揺りかごに掛けておけば、取り換えっ子をされたり、妖精の代母となるのを防ぐことになる。¹⁰²⁾ 妖精は、自分の子供を人間の子供と取り換えて、自分の子供を人間に育てさせたりする、との俗信がある。‘changeling’ という語は、「取り替え子・鬼子」の意で、妖精が攫った人間の子供の代わりに残しておく、妖精自身の子供のことである。

* 揺りかごやベッドには、赤いリボンや紐を結びつけておくと好い。¹⁰³⁾ これは、「赤色」には、悪霊・悪魔・魔女・妖精等の悪者たちの、魔力を封じる力がある、と信じた為である。なお、「リボンや紐」は、幼児の「衣服」が転じたものであろう {下4項め参照}。

これらに関連して、次の俗信もある。

* 揺りかごは、子供が生まれないうちに買い整えてはならない。¹⁰⁴⁾

* 揺りかごは、もう不用だとして人に譲ると、懐妊する。¹⁰⁵⁾

* 空の揺りかごを揺ると、懐妊する。¹⁰⁶⁾

次は、子供の衣服についての留意事項である。

* 子供の衣服には、どこかその一部に赤色系のものを着用すべきである、¹⁰⁷⁾ という古来の戒めがある。これは、現今においても、しばしば見受けられる俗信の一つである。特に、肌ざわりの良いフランネルで作られた赤い服が、子供によく着せられるようである。赤色は、悪霊や凶眼に対して、その力の発揮を押さえる効果がある、と古来信じられて来ている。

* 子供の衣服には、緑色系のものは避けるのが好い、と信じられている。「緑色」には、「妖精」のイメージがあり、¹⁰⁸⁾ それは、「妖精の着る服の色」故に不吉である、と信じられたか

らである。もっとも、妖精のすべてが悪者という訳ではないのだが、一般に妖精は、人間をからかったり困らせたりして、悪事を働く者が多い為に、不吉であるとされたようである。

その他、次のような育児上の厳しい戒めが観られる。

* 子供が1歳になるまでは、体重を測ってはならない。¹⁰⁹⁾特に、Oxfordshire では、昔から固く信じられている。子供の体重を測れば、それが数値で表されるが、「数」には場合によって不吉な魔力があり、下手をすると子供を危険に晒すことになる、と考えるのである。これに加えて、体重測定によって、子供の成長を「自慢する」ことが、神々への「不遜」になりはしないか、という懸念さえもが重ね合わされている、と観ることが出来そうである。

* 子供に乳歯が生えるまでは、鏡を覗かせては不吉である。¹¹⁰⁾アングロ・サクソン系の人々は、殊にそうであるが、一般に「鏡」については、次のように信じられている。

Centuries before breakable mirrors were invented, a shiny surface was considered a tool of the gods. Early man wondered at his reflection in the waters of ponds and lakes. Since he had no scientific knowledge, he supposed this to be the soul or “other” self, as he called himself in his dreams. He believed that this “other” self was injured if disturbed in any way.¹¹¹⁾

(割れ易い鏡がまだ発明されていなかった、何百年もの昔には、表面が光る物は、神様の道具であると考えられていた。昔の人は、池や湖の水に映った自分の姿を不思議に思った。科学的な知識が無かったので、彼はこれを魂、つまり「もう一人の自分」であると思った。それは、夢に出て来る自分のことをそう呼んでいたようにであった。もしも、いかなる風にでも掻き乱されれば、「もう一人の自分」が害を受けるのだと、信じたのである。)

このような考えから、人が鏡に自分の姿を映す時、その映っている姿は、実は「自分の魂」なのだと思い、必ず後でそれを自分に戻しておかねばならない、と考えたのである。大人ならまだしも、一歳にも満たない子供には、とてもではないが、自分で「魂を戻す」ことは不可能であり、魂を無くした子供は、活力に欠け、‘cutting his or her teeth (歯を生やすこと)’に支障があらうばかりでなく、生命までも奪われることになろう、と恐れいたのである。

日本でも、「鏡は神の正体」¹¹²⁾と言われ、「人間の姿を所有することができる」¹¹³⁾と畏怖の念が強かった。鏡が人の魂を映すものであるとか、鏡は神である、という考え方は、世界の諸国で酷似しているように思えるのである。

尚、歯を丈夫に保つために、「サンゴのお守り」が一般によく持たれ、赤ん坊の場合にも、

乳歯の生えるのを助ける、¹¹⁴⁾とされている。

*床などを這っている子供を、決して跨いではならない。¹¹⁵⁾這っている子供を跨ぐ行為は、先ずは赤ん坊に怪我をさせる恐れがある、という実際上の点からも、決して好ましい行為ではないと言えよう。しかし、実はこの俗信には、別の意味があり、それは、這っている子供を跨ぐことは、その子供の自然な発育を阻害する恐れがある、¹¹⁶⁾というものである。それはちょうど、小さな木の上に大きな木が覆い被されれば、小さな木には陽が当たらず、その成長が妨げられる、というのと同じ理屈ではないであろうか。特に、イギリスの Bedfordshire では、この俗信が固く信じられていると言われるが、¹¹⁷⁾これは、欧米諸国のみならず、東洋諸国にも観られる俗信のようである。日本でも、「子供を跨ぐと大きくようならぬ」¹¹⁸⁾と同様の俗信が観られ、これは大人についても転用されているようである。また更に、「人を跨いでしまった時には、縁起直しに、もう一度跨ぎ返せば良い」などと言う人々を見かけることもある。

*赤ん坊の、足の裏や顎の下をくすぐると、後になって吃るようになる。¹¹⁹⁾これは、極めて科学的根拠に乏しい俗信と言えよう。赤ん坊の足の裏や顎の下をくすぐることによって、過度に笑わせることが、唾液を詰まらせるとか、あるいは、喉の筋肉に不必要な負担をかけることになり、それが、発声器官に好ましからざる影響を及ぼし、やがては吃るようになり易い、とでも考えられるであろうか(?)。

*初めて子供にしてやる行為——例えば、食^そい初め・湯浴・接吻など——は不吉を伴い易いので、それに相応しい用心をすべきである。¹²⁰⁾「それに相応しい用心」とは、食物の実りの神や、水の神に感謝を捧げることを怠らず、また悪霊等に油断を見せて付け込まれることのないようにの意、と解せるであろうが、実際上は、病気に対して抵抗力の弱い乳児に対する配慮、つまり保健衛生上の問題ではないかと考えられよう。

13. 洗礼 [式] (baptism)

新生児の洗礼は、生後一週間以内の早いうちに受けるのが好いとされる。洗礼は、普通その教区の教会堂で行われるが、その際、牧師によって、赤ん坊の頭上に数滴の聖水(holy water)が3回振りかけられ、“I baptize thee in the name of the Father and the Son and the Holy Ghost. (父なる神、神の御子、及び聖霊の御名において、我汝に洗礼を施す。)”と唱えられる。更に英国教会派では、この時幼児の額に十字が切られる。聖水が振りかけられたり、十字が切られる瞬間に、幼児の体の中にある悪魔が、体外に出て行くことになり、それと同時に、幼児が大声で泣き声を発することが、日出度い事とされる。その泣き声は、追い出されている悪魔の悲鳴であると考えられている。従って、「大きな泣き声を発しない子供は、長生きをしないと考えられている。」¹²¹⁾

洗礼は、マタイ伝に記されるキリストの御旨に基づくものである。

Goe ye therefore, and teach all nations, baptizing them in the Name of the Father, and of the Sonne, and of the holy Ghost.¹²²⁾

(それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、精霊の御名によってバプテスマを授けよ。)¹²³⁾

また、'baptism' の動詞形 'baptize (古くは, baptise)' の語源は、

-OF. *baptiser*. -L. *baptizāre*. -Gk. βαπτίζειν.; ... to dip.

(古フランス語 *baptiser*, ラテン語 *baptizāre*, ギリシャ語 βαπτίζειν に遡り, 意味は「浸す」)¹²⁴⁾

であり、「浸す」とは「水に浸す」の意である。従って、元来洗礼は、「水による洗い」の礼であり、水による洗いは、物質的な水が肉体を浄めるのと同様に、魂を浄める、と信じられるものである。牧師によって、洗礼盤(font)の聖水が、受洗者の頭上に垂らされ、名親(godfather・godmother)によって、命名されることになる。幼児洗礼(infant baptism)は、洗礼の習慣のごく初期からあったのではなく、15世紀の半ば頃から始められた習慣である¹²⁵⁾とされている。

日本の「^{うぶすな}産土参り(宮参り)」¹²⁶⁾は、この洗礼の儀式に酷似していると言えよう。これは、生後30日前後(男児32日目、女児は33日目)が一般的に多い)の初めての宮参りであるが、このとき幼児は、神前で大きな泣き声を発することが、目出度い事とされている。泣き声は、幼児が自己の名乗りを上げることであり、それが産土神(氏神)によって聞き届けられ、神の子・氏子としてその名が登録され、産土神(氏神)の加護を受けることになる、と言われる。その際、幼児がタイミング良く泣き声を発しない場合、足の裏をつねることによって泣かせたりするとも言われ、英米人の間で、「洗礼時の pinch(つねること)」と言われるものと同じ行為であり、何処も同じ子を想う親心と、微笑ましい限りである。

13. 洗礼時の注意事項

* 洗礼の時、子供は声を上げて泣かねばならないが、「くしゃみ」をしてはならない¹²⁷⁾とされる。「くしゃみ」は、幼児のみならず大人の場合にも、欧米の人々にとっては、古来、「魂が追い出される(魂が飛び出る)行為」¹²⁸⁾だと考えられた。

* 幼児に振りかけられた聖水は、拭いてはならない。¹²⁹⁾これは、自然に乾かすべきものと考えられている。

* Christening cap (洗礼帽)は、洗礼式の日(時には、その当夜のみならず、更に長きに渡って)には被らせたままにしておく。¹³⁰⁾やや古い習慣であるが、かつては広く行われていたようである。その為、洗礼式で帽子を聖水で濡らし過ぎる傾向のある牧師は、評判が悪かったと言われる。

* 子供の名前は、洗礼式が無事済むまでは、近親者以外には明かさなくていい。¹³¹⁾ これは、子供の名前が知れると、悪魔が、その子の名を呼び、何らかの危害を加えるかもしれない、と恐れる故である。英米では今でも、実際にこれを守る親が少なくない、と言われている。

* 命名にあたっては、死亡した子供の名を、決してつけてはならない。¹³²⁾ もし、死亡した子供の名をつけると、新生児が、死亡した子に呼び寄せられる、¹³³⁾ と心配するからである。

洗礼式では、名親が、受洗の新生児に「名」を贈り、また同時に、祝いの贈物——‘apostle spoon (柄の先に、十二使徒の顔を刻んだスプーン)’が伝統的——をする習慣がある。これについて、次の記述が見られる。

The custom of giving children apostle spoons is no longer vogue, the present-day godmother usually selecting some article of silver — a mug, accompanied perhaps by a spoon, though not one of the apostle variety.¹³⁴⁾
(子供にアポスルスプーンを贈る習慣は、もはや流行してはいない。今日の名親は、大抵銀の品物を選ぶ——それは、十二使徒の類が刻まれているものではないが、多分スプーンを一本つけたマグである。)

不幸にして、「洗礼を受ける程の時間も経たぬうちに、死亡した子供が埋葬されるのは、教会の墓地の北側にある聖別されぬ地であり、彼らは天国には入れない。または、教会の軒下に埋め、天からの雨に原罪を浄めてもらう。洗礼を受けぬ子供は、本当に死ぬことは出来ず、地獄落ちからは免れるが、最後の審判の日まで、彷徨い歩くよう運命づけられている。」¹³⁵⁾ とされる。このような子供の墓は、‘unchristened ground’ と呼ばれ、その上を歩く者には、不治の病等の致命的な祟りがある、¹³⁶⁾ と一般に信じられているようである。

14. 安産感謝式 (churching)

安産感謝式とは、無事出産を終えた母親が、後日教会へお礼参りに出かけ、感謝の礼拝式をしてもらう儀式である。ただし、この風習は、イギリスの England 北部や Scotland において観られるものであり、イギリス全土に及ぶものではなく、またアメリカでは、この類の風習は観られない。

イングランド北部やスコットランドでは、一般に、母親が、このお礼参りを済まさないうちに、何処か他の場所を訪れることは、厳に慎むべしとされている。それを破ると、その婦人は、魔物に狙われるのだと言われる。¹³⁷⁾ イングランド北部のノーサンバランド地方ダラム郡では、それを破ると、母子ともに災厄を招くと固く信じられており、¹³⁸⁾ スコットランドでは、母親も訪問を受けた人々も共に、不幸に見舞われると言われる。¹³⁹⁾

安産感謝式に纏わる迷信の一つに、初めてこの式に臨んだ母親は、式後教会堂を出た時に、最初に顔を合わせた人が男性ならば、次の出産には男児を授かり、女性ならば女児を授かる、というものがある。¹⁴⁰⁾

またスコットランドには、初めての外出をする乳児を迎える家の者は、その子の生涯の幸福を願って、塩・パン・卵、それに硬貨・マッチ等を祝儀として贈り、また、母親にも飲食物を出して歓待する、という習慣がある。こうした習慣を等閑なござりにすれば、訪問を受けた家の者は、やがて飢餓の苦難に見舞われる、¹⁴¹⁾と戒められている。迷信・俗信には、このように人に義務を押しつけ人を縛りつける、という極めて厳しい一面が観られるようである。

〈次回は、Ⅱ 死 に続く。〉

註

- 1) *Dictionary of Symbols and Imagery*, flower 21-b-d; by Ad de Vries; North-Holland Publishing Company, 1974
- 2) 'Break a mirror and you'll have seven years of bad luck.' とされる。
- 3) 塩を零すこと (spilling salt) は、縁起の悪いこととされるが、その時一つまみの塩を、悪魔のいる左後ろ方向に(左肩越しに)投げれば、災難除けになると信じられている。その迷信から、縁起の悪い事が起きると、一般に塩を左肩越しに投げて、縁起直しをする。
[参考] *The Origins of Popular Superstitions and Customs*, spilling the salt pp. 167—8; by T. Sharper Knowlson; London: T. Werner Laurie Ltd., 1930
- 4) 同書
- 5) 『英語世界の俗信・迷信』 p. 224; 東浦義雄・舟戸英夫・成田成寿共著; 東京:大修館書店, 1974
- 6) *Superstitious? Here's Why!* p. 58; by Julie Forsyth Batchelor & Claudia de Lys; Tokyo: Hokuseido Press, 1974
- 7) 同書
- 8) *THE HOLY BIBLE*, Genesis II-22; An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the AUTHORIZED VERSION (1611); Oxford: Oxford Univ. Press, 1985
- 9) <和訳借用>『聖書』創世記 II-22; 東京:いのちのことば社, 1981
- 10) 『故事・俗信 ことわざ大辞典』 p. 509; 尚学図書編; 東京:小学館, 1982
- 11) 文殊 [菩薩]:「Mañjuśrī 文殊師利の略。此菩薩は普賢と一対にて常に釈迦如来の左に侍して知恵を司るなり。」『(織田) 仏教大辞典』文殊 <要旨引用>; 織田得能編; 東京:大蔵出版, (新訂再刊) 昭和29年
- 12) *An Etymological Dictionary of the English Language*, superstition; New Edition Revised and Enlarged, by Rev. Walter W. Skeat; Oxford: Clarendon Press, 1978
- 13) *British Traditions and Superstitions*, p. 6; by James Kirkup; Tokyo: Asahi Press, 1975
- 14) *An Etymological Dictionary of the English Language*, superstition; [12]
- 15) *The Encyclopedia of Witchcraft and Demonology*, Salem Witch Trials pp. 429—48; by Rossell Hope Robbins; New York: Bonanza Books, 1981
- 16) ジャンヌ・ダルク:「[仏] Jeanne d'Ark 1412.1.6. -1431.5.30. フランスの愛国少女, 聖女。ロレーヌとシャンパーニュの間の小村ドムレミ (Domremy) の貧しい農家に生まれ, 幼児より篤信で, 13歳の時から大天使ミカエル, 聖マルガレータ等の声を聞き, フランスをイギリス軍から解放しようとして, シェルブルックに謁し, 6千の軍隊を授けられオルレアンの解圍に赴き, イギリス軍を破って包圍されたデュノアを救出した(1429)。後に, 王の側近に嫉まれ, ブルゴーニュ公の軍に捕えられて(1430), イギリス軍に売渡されルアンに幽閉後, 宗教裁判により異端の宣告を受け, 同地で火刑に処された。後に異端の汚名をすすがれ(1455), 聖女に列せられる(1920)。」『岩波 西洋人名辞典(増補版)』ジャンヌ・ダルク <要旨引用>; 岩波書店編集部編; 東京:岩波書店, 1981
- 17) 百年戦争:「(Hundred Years' War, 1337-1453) イギリス, フランス間の戦争。フランス王位の継承

問題に、羊毛業の盛んなフランドル地方の領有問題が加わって、両国の王家が対立した百十数年に渡る戦争。1430年頃までは、イギリス軍がフランス西南辺を占領したが、ジャンヌ・ダルクの出現などによって、フランス軍が攻勢に出、イギリス軍は連敗して戦争は終局した。』『(新編)西洋史辞典』百年戦争〈要旨引用〉；京大西洋史辞典編纂会編；東京：東京創元社，（6版）平成2年

- 18) *A Treasury of Superstitions, Nursery Lore and Facts about the Stork, Bringer of Babies* p. 41; by Claudia de Lys; New York: Philosophical Library, Inc., 1957
- 19) *Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology and Legend*, babies from the earth, lakes or wells; by Maria Leach; Funk & Wagnalls Publishing Company, Inc., 1972
- 20) 同書 babies from cabbages
- 21) *British Traditions and Superstitions*, p. 23; [13]
- 22) *Folklore, Myths and Legends of Britain*, confinement customs p. 50; ed. by The Reader's Digest Association Ltd.; London: The Reader's Digest Association Ltd., 1977
- 23) 同書
- 24) 『英語歳時記』「雑」 p. 441；成田成寿編；東京：研究社，1979
- 25) *Dictionary of Symbols and Imagery*, knife 8-B b; [1]
- 26) *To A God Unknown*, 14 p. 76; by John Steinbeck; New York: Bantam Books, Inc., (16th ed.) 1968
- 27) 〈和訳借用〉『知られざる神に』 p. 121；高橋悦男訳；東京：東京現代出版社，1969
- 28) *Dictionary of Symbols and Imagery*, birth 8-A a; [1]
- 29) 同書 iron 12-A-c
- 30) 同書 birth 8-A-c
- 31) 同書
- 32) 『プリニウスの博物誌』III 鷲石 p. 1484；中野定雄・中野里美・中野美代共訳；東京：雄山閣出版，昭和61年
- 33) *Dictionary of Symbols and Imagery*, eagle O-b; [1]
- 34) 同書 bell 14-c
- 35) 同書 feather 16
- 36) 同書 feather 1
- 37) 『英語世界の俗信・迷信』 p. 63；[5]
- 38) *Encyclopaedia of Superstitions, Times of Birth* p. 53; by E. & M. A. Radford and ed. by Christina Hole; London: Hutchison & Co. Ltd., (revised) 1961
- 39) *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, May: May unlucky for weddings p. 696; Centenary Edition revised by Ivor H. Evans; London: Cassell Ltd., (6th Impression) 1978 (First published 1870, ed. by Ebenezer Cobham Brewer)
- 40) 『英語歳時記』「雑」 p. 411；[24]
- 41) *The Oxford English Dictionary*, chit; London : Oxford Univ. Press, (reprinted) 1970
- 42) *Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary* 『小学館ランダムハウス英和大辞典』 chit; 東京：小学館，昭和48年
- 43) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p. 309；ed. by Iona and Peter Opie；Oxford：Oxford Univ. Press, (reprinted) 1991
- 44) 『万有百科大事典』第9巻（世界歴史）曆；東京：小学館，昭和50年
- 45) *British Traditions and Superstitions*, p. 22; [13]
- 46) 同書
- 47) *David Copperfield*, XXX p. 421；Everyman's Library；by Charles Dickens；London：J. M. Dent & Sons Ltd., (reprinted) 1965
- 48) 〈和訳借用〉『デイヴィッド・コパフィールド』（四） p. 21；市川又彦訳；東京：岩波書店，1950
- 49) 『日本民俗学大系』第7巻 pp. 6-7；東京：平凡社，昭和33年

- 50) *Encyclopaedia of Superstitions*, Times of Birth p. 53; [38]
- 51) 同書
- 52) 同書
- 53) 同書
- 54) 同書
- 55) 同書
- 56) *David Copperfield*, I p. 1; [47]
- 57) <和訳借用>『デイヴィッド・コバフィールド』(一) p. 17; 市川又彦訳; [48]
- 58) 『医学英和大辞典』footling; 加藤勝治編; 東京: 南山堂, 1978
- 59) *British Traditions and Superstitions*, p. 23; [13]
- 60) 帝王切開術: 「外科的に子宮を切り開くことによって新生児を牽出すること。…古代においては、この手術は死体においてのみ行われた。生きている婦人に対する帝王切開は20世紀初頭まで恐るべき危険を伴った。」『医学大辞典』帝王切開術 <要旨引用>; 森岡恭彦監訳; 東京: 朝倉書店, 1985
- 61) *Dictionary of Symbols and Imagery*, child V-2; [1]
- 62) 同書 birth 8 c
- 63) 『プリニウスの博物誌』I 手術による出産 p. 305; [32]
- 64) 『医学大辞典』帝王切開術; [60]
- 65) *Macbeth*, IV I p. 112; by William Shakespeare; The Arden Edition of the Works of William Shakespeare; ed. by Kenneth Muir; London: Methuen & Co. Ltd., (reprinted) 1974
- 66) <和訳借用>『マクベス』IV-I p. 77; 福田恆存訳; 東京: 新潮社, 昭和44年
- 67) *Macbeth*, V-VIII p. 159; [65]
- 68) <和訳借用>『マクベス』V-VIII p. 115; 福田恆存訳; [66]
- 69) 『英語歳時記』「雑」p. 411; [24]
- 70) *A Treasury of Superstitions*, p. 309; [18]
- 71) *Everyday English Superstitions*, p. 7; by James Kirkup; Tokyo: Macmillan Language House Ltd., 1987
- 72) *Dictionary of Symbols and Imagery*, North 7-a; [1]
- 73) 『英語歳時記』「雑」p. 411; [24]
- 74) 『医学英和大辞典』caul; [58]
- 75) 『英語歳時記』「雑」p. 411; [24]
- 76) *David Copperfield*, I p.1; [47]
- 77) <和訳借用>『デイヴィッド・コバフィールド』(一) p. 18; 市川又彦訳; [48]
- 78) 『英語世界の俗信・迷信』p. 64; [5]
- 79) 『小児保健』生歯 p. 45; 坂本吉正・藤田弘子編; 東京: 朝倉書店, 1979
- 80) 『英語世界の俗信・迷信』p. 64; [5]
- 81) 同書
- 82) 同書
- 83) *Dictionary of Symbols and Imagery*, earthquake 3-b; [1]
- 84) 同書 nut 10 a
- 85) (*Eric Partridge*) *A Dictionary of Slang and Unconventional English*, nuts; ed. by Paul Beale; London: Routledge & Kegan Paul, (8th ed.) 1984
- 86) *Encyclopaedia of Superstitions*, birthmark p. 53; [38]
- 87) 『日本民俗学大系』第12巻 p. 90; [49]
- 88) *Encyclopaedia of Superstitions*, birthmark p. 54; [38]
- 89) 同書
- 90) 『英語世界の俗信・迷信』p. 63; [5]

- 91) 同書 p. 64
- 92) *Everyday English Superstitions*, pp. 6-7; [71]
- 93) *A Treasury of Superstitions*, yawning superstitions p. 187; [18]
- 94) 同書
- 95) 『英語歳時記』「雑」 p. 411; [24]
- 96) 同書
- 97) *Dictionary of Symbols and Imagery*, elder 12-A-b, 12-B-a; [1]
- 98) 同書 cradle 6-b
- 99) 同書/『英語世界の俗信・迷信』 p. 63; [5]
- 100) 『英語世界の俗信・迷信』 p. 63; [5]
- 101) 同書
- 102) *Dictionary of Symbols and Imagery*, garlic 5-a; [1]
- 103) 同書 red 17-c
- 104) 同書 cradle 6-a
- 105) 『英語歳時記』「雑」 p. 411; [24]
- 106) 同書
- 107) 『英語世界の俗信・迷信』 p. 64; [5]
- 108) *Dictionary of Symbols and Imagery*, green 28-a; [1]
- 109) *British Traditions and Superstitions*, p. 23; [13]
- 110) 同書 p. 21
- 111) *Superstitious? Here's Why!*, p. 57, Action: Breaking a Mirror; [6]
- 112) 『故事・俗信 ことわざ大辞典』鏡 p. 243; [10]
- 113) 『日本民俗学大系』第10巻 p. 93; [49]
- 114) *Dictionary of Symbols and Imagery*, coral 8-d; [1]
- 115) *British Traditions and Superstitions*, p. 23; [13]
- 116) 同書
- 117) 同書
- 118) 『故事・俗信 ことわざ大辞典』人 p. 969; [10]
- 119) *Dictionary of Symbols and Imagery*, tickling 3-a; [1]
- 120) 同書 child V-1
- 121) *Encyclopaedia of Superstitions*, p. 29; [38]
- 122) *THE HOLY BIBLE*, S. Matthew XXVIII-19; [8]
- 123) <和訳借用>『聖書』聖マタイ伝 XXVIII-19; いのちのことば社; [9]
- 124) *An Etymological Dictionary of The English Language*, Baptism; [12]
- 125) *Question Box XIV* 洗礼 p. 156; 石橋幸太郎代表編; 東京: 大修館, 1963
- 126) 『日本民俗文化大系』第10巻 p. 393; 森浩一他著; 東京: 小学館, 昭和61年/『民俗学辞典』pp. 566-7; 柳田国男監修, 民俗学研究所編; 東京: 東京堂出版, (53版) 昭和54年
- 127) *Encyclopaedia of Superstitions*, p. 29; [38]
- 128) *A Treasury of Superstitions*, p.178; [18]
- 129) *Encyclopaedia of Superstitions*, p.28; [38]
- 130) 同書 p. 29
- 131) 同書
- 132) 『英語歳時記』「雑」 p. 412; [24]
- 133) 同書
- 134) *The Origins of Popular Superstitions and Customs*, p. 108; [3]
- 135) *Dictionary of Symbols and Imagery*, grave 8-B-a, b; [1]

- 136) 『英語歳時記』「雑」 p. 413 ; [24)]
- 137) 同書
- 138) *British Traditions and Superstitions*, p. 23; [13)]
- 139) 『英語世界の俗信・迷信』 p. 65 ; [5)]
- 140) 同書
- 141) 同書 pp. 65—6/『英語歳時記』「雑」 p. 413 ; [24)]

Speculation concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans — (1)

Kunihiro FUJITAKA

Faculty of Liberal Arts and Science,

Okayama University of Science,

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1992)

Like other nations, the life of English & American people is full of a variety of superstitious beliefs, whether they notice it or not; it could be safely said that people are likely to be surrounded by various superstitions. One good example showing that most people do care is that they dislike to spend a night in room number 13 in a hotel, another that they would not get married in May. Such superstitious customs of theirs are often seen, I believe, showing that superstitions are part of their life, or, broadly speaking, background culture.

The word 'superstition' sounds to us rather frivolous because most superstitions are not scientific at all, but the origin might be something born out of ancient people's sincerity and desperation. The systematic understanding of the phenomenon of an eclipse of the sun is easily made by modern people through science, while the mystery of this natural phenomenon could not be understood by ancient peoples, and it could lead them to a great horror full of danger and possible death. So the answer which they made up laboriously was a great belief. We could admit that our present-day 'superstition' was their ancient-day 'conviction.' As a tragic example of such conviction, we can see the fact that many people who had been regarded as witches were put to trial and executed in Europe and America in the Middle Age.

In the present report on superstitions, English & American people's old manners and customs will be shown along with their superstitious beliefs. Each superstition will be speculated on from various viewpoints: such as ethnographically, or psychologically, etc. The publication of this study on superstitions will be made in the form of a series from now on. This time, in Chapter I, I would like to speculate concerning 'birth' superstitions in particular.